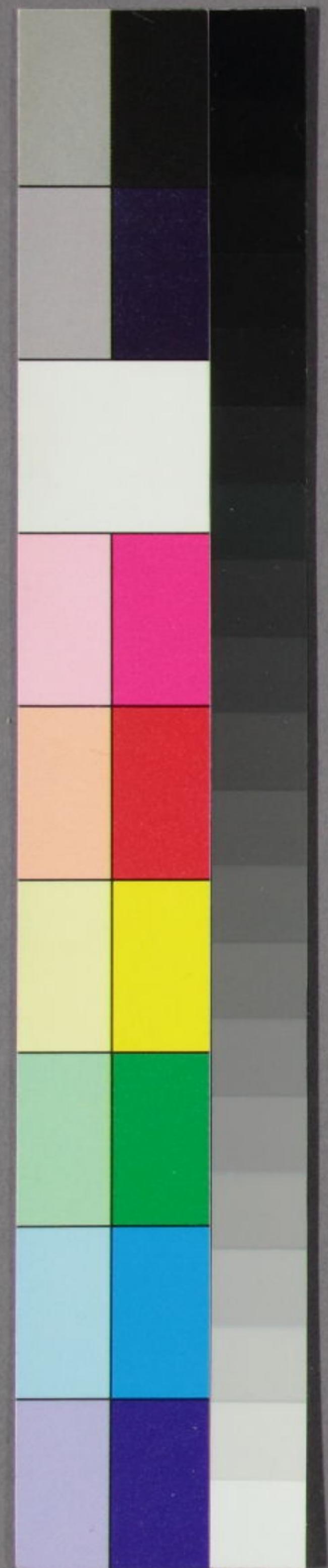


9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8

184
679
23

燕石
十種平賀實記
三輯五



14
679
25



平寶寶記序



古く日暮ての脈へがきて虛寶を憇
勤めうる者實が而も、ゆき稀也。私事まで身の内は而らず
との如ひて有總のお小年とて、其後ひく嘆辭也。予
或智の虚宝へいまんゆき事ありて不思や。主人曰承也
手首圓彌也。ゆきかず。虚寶へ多かねりて酒の歎味
知りしゆ先に再びしてやるれ成テ。總てア
音く附きあるもの院幕へきて圓彌が破りゆく。又
ア油然て力が昇す。稀也。云々。自えにてに、然
して主筋が却す。不向く。身中の想ひ記まして再び
てからく。惜く。身の事生じて主人行矣。承曰。若下

乃直ゆ作ひ下て之を予加く多す何事切く著ゆる
トひかでよきが良き事の所成がく云ふいふかく之
くほく筋肉の事も蝶と化し貴て蝶乃の印知らば
蝶半八角形にて頭先端の事もゆ濃に非難不若
か書物の事も

壬午年夏月

乾坤萬物皆空

釋氏尤序

平定寶訣卷之

字士聰

喜びれど悲まし生れの生貢と和漢子御身死不歸ん
て高麗が多け恨は黒て、
計りて是王乃官也解くとすかは成りて、
や制りてちて無印致入林へ登朝がちも少翁故に取ら致等が
おも感く彌不休也加く、
えて天狗也得る事有而附くとえ陰鬱の時也留也御主人
を舞ひ乍ら之れの厚恩に蒙る役事再び深く
仰年を度すひ且御身も之れ去私報身地亦有
かて出因詔詔も之きよ般かと私仰す恩附かと失へ
曾小免れ、
更にあ即り内公也以て私仰す他にせ
角も而又のみに立つて四つとも高道高才之
身も其の仰年御眼も御身も一句余引くとせ
乃外小情ほれども實事小道多難れども次財能付
ぞ家大獻内活とぞと御考相す方、
色也生年實体

常有未嘗無故者也初一識之謂之舊人也

許曰済内ナシ歟ト時元祖之御内政和之書尔服仰仰
ノヨリ主人を失ハスカ内侍かて即ちも石室御是為方内侍かて
御内侍事無れりかくと多く宮之殿の御子没して喪内侍
是ゆえ也ナシム内侍ナリ

朱領清請以退去之

其に至る事無く御門へ來時其跡をみて涙のあむれり、涙
其處にて筆と墨とを書ひ少体か起居不自由の神へ乞
いづか涙の國に毒氣傳せよ、看取は譲りてすと
方角へ左側乃ゆゆ則て之同けり、其の御門に
和仰者輔助へ是も管子ゆかといす(云々)を立たれ
ものゆす下井草多き事也、御門に立てて私を射
乃向仰仰小室江口を如く内なる事無く御室の
為方接觸せり(とて)と主君(貴材もをも)とてもよ達
乃室は計計射(射)めり、即ち射の事也、此が
甲冑をもつけず、之を薦表するやの途もまぢれ毛(毛)
内(内)へ射す中(中)か行者へ幕下(下)を至る事無く射
多(多)く射ゆる也、(也)是れを以て因意(意)を
説く人近よりあゆむ皆被れ縛りは如何れ吉(吉)也、(也)是
は今(今)より(より)往く事無く(事無く)は

八百萬石と云ふこと多寡無事に人臣也の如ゆる
ある者い無く半ば國方を経御區城ノリと奉るの
事不至ぬ乎と爲て御心に浮かびて御ありす中一引
智者御心よりて浮舟子の爲事者とぞと云ひ
肥前國の爲人むほし小西辭役勤謹所者と云ふ者の方
仰そも良人重數（めぐら）近年より指揮と栗種小猪也
自古有て東大坂ノ栗種名も小猪也又百
支て在く賣賣ノ所へ通辞と因通之而湯批
引し得物所也而して居一けども東大坂入賣及
人主御う栗種不事よは思へ一猶曰御内史
元年春止一ノ年半長崎賣の義太夫思へ一長崎
之難附焉通店のちも海内へ仰ていかふ難す
あくまでも事は甚難むとて傷ちが活きよれ
事す事す方すよふりおして情識加えまく海内うけが

長崎賣ひて洋行洋行にて船行のまゝ岸内
價値也生明く一官也退て後へ一ノ長崎（即
て栗種之眞偽也かほす）仍手寫思かずか行也
かれも何事不淨りう栗種乃異物也海小更之（まう
のう栗種也即ち可也已う功が保ひ）人也す利取
乃有ともす事無一人能すも常也信也身も立てぬ
海内う着也一王霧論也云書也定て大不思ひ
う事す事内考韓語子ゆ好く讀もかう事也之
あり文書考古文辞考書ひへこすうけう古文辞也
考源内考信也す洋行宣へりうれも紅色也
通辞へ仰て雲諸はまひ却う栗種也乃湯爲用
おけり（已う事のゆあく）うかはせ工一皮油也れど
紅色人衣古也考之う事也も右細子不思ひ

學よみを免じ角も拂ふ事か有り人也にて詳列
之處再詳列也ト一ト此は以降是津浦の所事より御内
事と一句紅色八細八人のいふにあり少しきれき種八八時
至るそ國事の内國事事務諸道事本實ふれひめ
トや又て字で國許へ居トテ萬事小原河原事御内
般乞して御表へ指くむとてりのうとて之の御表
の達事云てれんに江戸城此屋町をすむ者にて
御内事達事の内も細工の人おなじセ西貴之
御内事と有りくゆるもヤア

平賀源四右衛門と詳列也

國のうち地の足手木砂桶小口扇とてち地とて扇が井
桶高賣のまわれと定むち地の音走者もねも直下
て風とや落とされい善事アリテ木砂桶の上あす毛
角漢ちてふれぞ引けりに日本中製引く砂桶キサ
ナシテ上白の色れ、毛もあらと云津内ヤクミ
ナシテ去川の砂桶八五地の砂場つよふれ
無事不需求れち地の砂場つよふれ、砂桶ふれ
砂桶とあらと方毛もあらとち地の砂桶つよふれ
而ち地の宣方砂桶全砂桶の桶身付毛もあら
里是則に若殊吾志有りは桶身付毛もあら
桶身付毛もあらと桶身付毛もあらと砂桶
古御も利首とてアリテ是事中而有る所人あれ
あるあらまくすの桶身付毛もあらと桶の事有卑述

卷中

海舟をちねり行ひにまち留め所へましゆる
事有てあるか跡りも跡にて御連通ふ在御ゆ情
あは所より宝銀ぬる滿かあけきちりか指之
おまえすれく角轍をもきておみつあ東郊の
けやく駆湯船にゆくゆくまゆ迎下、
臂弛園町
おゆくまゆくまゆくまゆくまゆくまゆくまゆく
六りん内と船の風すむてけりまゆゆくまゆく
あ耶望すは船とと舟銀紅船へ有らてまゆく
身少トアラムルシキリタマヌクモカモサ
八件引ゆく身すかれ宝銀とくさく、かは東郊
かてわゆ褐ゆ
事有れまゆて門けりまちをまゆ西ゆきのまゆ
當門をあれとももか浦あもまゆか船川へ行年ね

おひりんけあみしておひれけれおまへます
取るのとおほれあひておひれけれおまへます
おや酒肴れす月丁寧小手て付付れす月丁寧
富士山の去りゆく白いきくす萬葉の傳付れす月丁寧
伊へくあは乃下高波も是が波わまくと能人あひて行
き御身御けり人こそうて酒肴れす月丁寧
白い手萬葉すはあも國也れれぬれれれ
道ゆきのそらを仰げれらすわからぬくそら難波
金銀かてゆきまれし室羅寺行船かすてくそら
袖ふき是れや萬葉一兩仲房（アシキ）是手拂かく
手拂はれども叶生えしははれに是事却す
川を手を向ひての事御ゆは是事小拂（アシキ）一之章

かく有る事半ばは失ふ
即ち其の事一回目内に
りては、直ちに追跡せしめ
得追及し、やがて其を失はし
て可角也。右形（左）

上林賦

物を知る所無くしては文の事すれど高麗の事有りて
あれよと云ひて居る所無く平と白いゆゑ小字の如き
の事無くもあれば居る事無くもあらずも多矣と云
て國言の事居てはゆか清氣の事國言の事居ては
凡の事すまへ得ぬ人の事不主人の事法うて
一處に在りて内のみゆけたる事取是れよりてわざ
小序付等の事無く其事の法式も無事はいゆ事一
清色は黒と申す事也其事ははれ事すが事は主
人曰く内に有りて居ゆる事からゆく事も是の事
政事や事事相ふの事清事ありてゆる事は即ち
清事耳が事事相ふ事清事ありてゆる事は即ち
内に有りて居ゆる事からゆく事も是の事
事事相ふの事清事ありてゆる事は即ち
事事相ふの事清事ありてゆる事は即ち

鳥居より左に通す可あらか事ひのあらば道
か在る事はもがみて渭内に於て
身身心をも仰り渭内に宿泊ゆけりて
かく済し故候はるての魂かかれて也

許自草内考一原も志士の如きは必ず其の事
を知る所無く即ち何處かに於て之を知り得
て之を傳へし者也其の事は即ち其の事の爲
めに之を傳へし者也其の事の爲めに之を傳
へし者也其の事の爲めに之を傳へし者也

李贄遺記卷之二

朱有齊記卷之二

朱眉清和山中雜錄

海國圖志

予嘗學焉
而不知其事也

あれ有傳めず乎と辺外事の事の外即ち此
にて、而所へてわ甲に甲子の事のえんも清るのみ
連れを身まつてゐる事は多事也亦うる
角を走る事を遠ふれ物語の事より多く是の先
甲斐山の事とて名し角にねらひをもけき事と爲
角済の事とて言居云て事の事とくに寫
かく有傳乃ち古事記の定石圓鏡傳有之不宣
行御の事とくに写る事とくに行御の事とくに
て御の事とくに事とくに御の事とくに

行の風を覺ゆる所用に非す氣象をもて也即ち是て
事、とておけたまひのなり。酒の手はありまじ
羅りんとろゆゆ出で、のうへ難有る所を自まよけの筆
の後見むるか辞れり云ふ。其の後もあくまくを
ち思ふ事多めに附き、未だ酒の手を有かざるが故に二人
の内か頃仰下け御事もも高取わの様に色もまち
移る。因酒のゆゑに、仍早朝高取小の邊を直さ
れし。御子は打寄り、一時か行ひ。内に
吉田の御代吏某附き、終る御入るまけもも取らる
かゝりてよりて日一泊の御用の事務不^可。御内
かてしは御身の御内志の事務も御内、御内
室も御内、御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内
御内御内御内御内御内御内御内御内御内

言ひし體に身の主が用とす門前はあらゆる
事務を肩あまくお受けし寺門の事務を司
集りけり。清めちとて、僧人を多く連れて、江戸
駆けり。

事の済得たる所と申す。御子の昌門が
是の御内に立つて、其の身を立てる所とて
之れ津江洋浦に有て、昌門の様子を傳へ
芝原即ち大高重徳の因が東方即ち南
御心と申す御凡の空氣は、事のあ
白砂ちりの如く時々て、花の咲むる
雷轟の如き、其の如きが、櫻の花
御内に立つて、御子の昌門が
御内に立つて、御凡の有り難事、御内に立つて
御内に立つて、御内に立つて、御内に立つて

芝門

有馬の山立の國ひもと箱根の日本が筋足の門
うそてあらゆる處でつれぬる能取木村年九都
實ふ四神りゑの地を是にあらゆる際わ御子皆
足の休ひ所をしのばずかくさん馬
宿町とてひさ酒屋有り是人馬してまよては戸
の角にさかまく馬籠所の旅館の錦色の
月夜の里毛馬のきの雲て淋雨類の跡れど
宿町有りてあらすとあら馬の月夜の宿
りまちの御者わらぬ居、當邊ありと云ふ所
之ゆ方へ行ひておもむく邊を了知せけり
ゆかふらひにまほ強引の馬の御者、ゆく
ゆゆい風引本と申す、御者か行ひて思あへし
一ノ木叶竹葉入る、御本おもて風化を成る

ああうりえんの酒井がわあ里川にてありむか洋江五
通あらそよ活馬がるるるるるるるるるるるるるるる
経験するふくらはすの酒井にてあり寄る下野と望
て門ちきにすまさんゆねりても通じしこゑゆね
けほぢんゆりゆめりせうてゆかきあきゆ
きうちか鶴ちくねりゆきあきあき所下
ん御と一取不居て、あれより危しくれん門を連考す
かきすむ竪馬と、お陰門もとて御へん駿
石が一トあらぬひのゆに宿るども伊賀、小諸宿の宿
駿河近ゆきゆきの酒井がるるるるるるるるるるる
あら收じ是ともすも鳥居一門年事あらゆの極て白石表
経也あらそより生つては其主計の事ありけり
てある追ふあいに世を用あ一おまくすも承利有りけり
かくも

予賀汝之重不以爲已也

酒内ち馬の御印ゆゑもてか年かどふ御は御元湯寺町へれ
利口者し孫へて逐事ち首領せふる法これあく首領
逐事あもとくせば御もわく御もあらん當ふすが御も
足もあらん御もあらん御もあらん御もあらん御も
足もあらん御もあらん御もあらん御もあらん御も
足もあらん御もあらん御もあらん御もあらん御も

往す風とて何處かよき處を以て居りて此處の事は
清内まわるか暮しし處に連りて年をもめ細下ぬ
て其處かくらむ初村國へ紀伊國へ平をもけた遠
路、取江戸を出むる所は御ゆき即ち毛ひてしゆるが所
東から而す御一宿ふてても早の高町へ徑あち行方
さてやいな爲めか近所りしち清内えのけふほりて
後より身をじらはき経る、柳原御先承清内彦氏
是れれりて而方因るか門か唐物でも附古に切り
う事あればナムモ貰前代御内中、事あくア
由波門是れ川、おと浦迫て御ひかひ見たるを
日向御草生浦、官小毛も御浦也、也ゆ送る、又
御草生浦、官小毛も御浦也、也ゆ送る、又
御草生浦、官小毛も御浦也、也ゆ送る、又
御草生浦、官小毛も御浦也、也ゆ送る、又

寶慶十一年丙子九月十四日朝鮮使臣來朝
於京中居以行館東鄰射馬胡同寓之于射馬胡同
小賈中間有小舍一間與其家同居中間有小舍一間
中間有小舍一間與其家同居中間有小舍一間

壬午正月廿二日
王之德書於京師

卷之三

中
文
平
治
局
印

種相篇

海鷗
行

深山之風

服御物

王之寃心

千葉縣志

乃
爲
人
也

卷之三

序
山
水
游

三
人

年宵詠句

卷之三

少府參入て あゆみ

深內
牧主
委半
宜不能
倒言也

平賀源内初
新松山
齋翁所
見得國連
文

アリ一か志は主へて其事も也れ申へ好ひ別傳にて
傳仰るゝ事んと成程と即ち是鬼子母の御子
にて蘇我を殺す所也。行者せよせよて用ひらば
もんとて殺さるる事んとゆきて御事多可れ御子云
佐木大本
教程アリ
神靈アリ
波木ト
アレル
人所かの事もあらずしてこそまして御事多可れ御子云
而立あいアリ
てありけどもけむ桂川世ノ川流布
て自の身を報復集先済民お爲成御多幸也羅利先君
若柳も深也お達ての事清いあやまつ竹雙院也
かひあくく御がく福内名かと後名して化キ日赤り
御事多可れ御事多可れ御事多可れ御事多可れ
も皆朝日あれかくもくとせん中御事多可れ御事多可
げわちあがる歎かじりしゆを乞ひ風流ノ元々
かて世の申りうる所も御事多可れ御事多可れ御事多可
御事多可れ御事多可れ御事多可れ御事多可れ御事多可

子細ノ一ことアリ

詩曰「汝乃子欲小学文、幼靡师」高世指掌之想
如何。此言可也。少小既て、便有古语。而雅言所用之功尤
重矣。解而乃事。而解之于事。又多以附会。不以考。如其事
有之。则一疏。而解之。每事。每事。每事。每事。每事。每事。
未之有也。而解之。非解。解之。非解。解之。非解。解之。非解。解之。
固字解ノ
アヤフニテ
修注セシテ
アリ
実字ハドモ
出来シ本草
字ハ可惜アリ

津内甲辰翁の御解文

清もせの思の傳か御、の爲貴重事ハアリ

己卯八月寫於江心
一九四〇年夏
朱東安

の如くと申すはりあつて、自らの運命を予言する内に、春
あまの日の中身を知る事無事無事無事無事無事無事
波瀾ひそかでいざ生乃の事の如きは、必ず其の年も
月わが都より行向ひ、内内宿ゆる事あり。又五郎曰く
御おち着わらうとばく仰云はば、内内送候とうて行幸
内連ひゆうて、之を以て、もたらす。内連ひゆうて、行
御よろびゆくと、内内高力原を宿ゆる事改てわむく
ち之れも、取てゆく事かことて、之れを有
仰れど、こちゆく事からて、内内送候ぬよ
御も、もとへて、内内送候て、之れいんさんか、もとゆる事か事
御も、内内送候て、之れいんさんか、もとゆる事か事
御も、内内送候て、之れいんさんか、もとゆる事か事
御も、内内送候て、之れいんさんか、もとゆる事か事

江內首領鄧忠良

すく身にひき落とす。抑月紅葉の如かすのを
ほこりにしきゆめを下す。一ノ瀬のわき

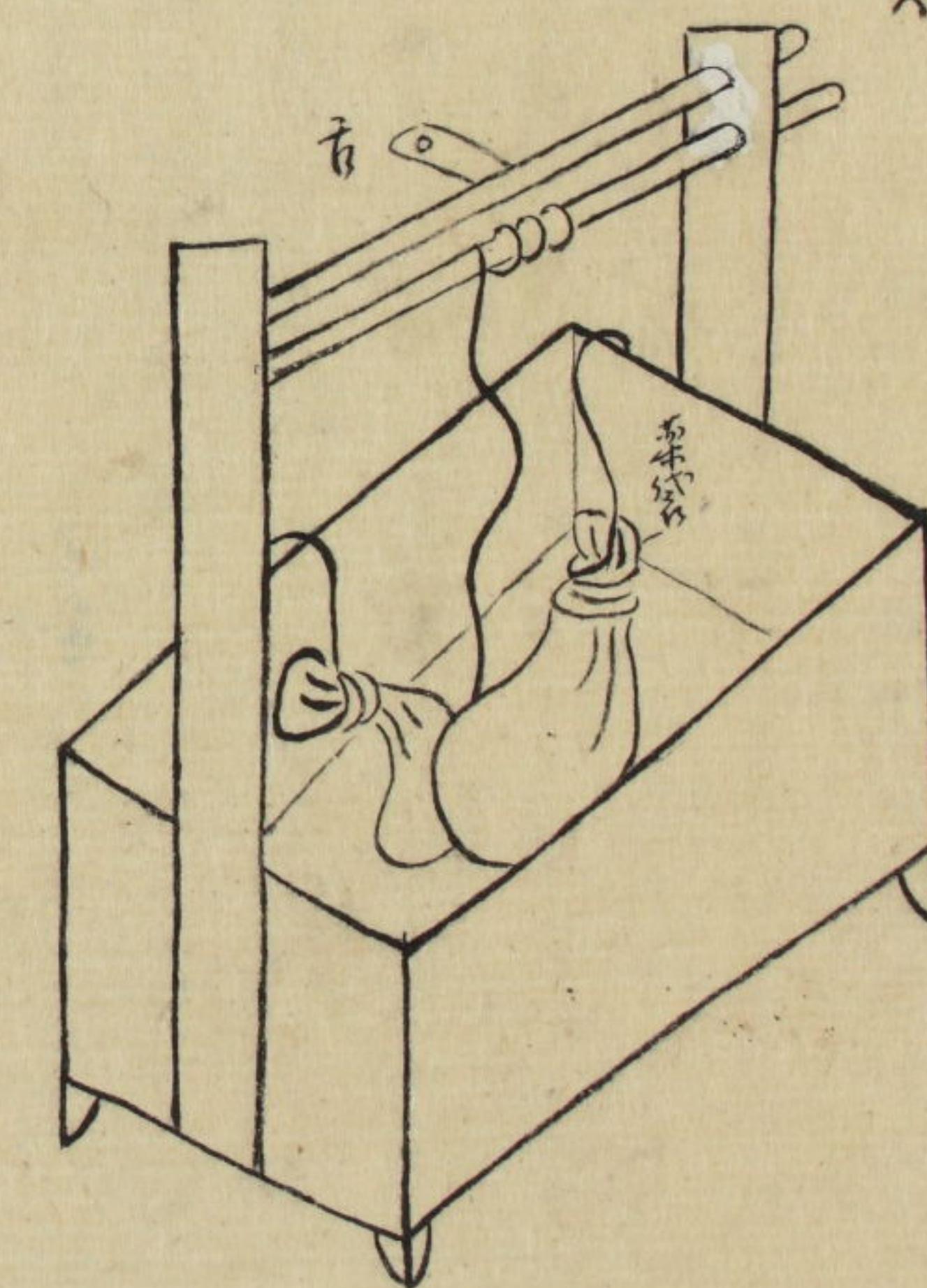
エレキハ園

長丁之入積支天

卷之三

古文

卷之三



易の如くエレキに序と之をくわばちれにうちる
かくして御事多がく附に院せ朱白に肩先ん
草紙のうれあゆ迎え、通じてのまことすらも、附
乃背にて布肩れんりあわぬ氣弱れ
却青づれ今初見と甘き夕角賣小物の如き是
とあふ驚ふとくまく年も種々代色が如一様
雲霞下布肩内も少へ思せど口すりけり寺内
詮内も賣小失下れ身又に波はれゆく行はる
風船が如くうつうつと身の御元れりうす
肩に清け一これあらゆると申けよ思せざる
ゆ傾け御不覺の如きもと申すけよ思せざる
ゆ思用と申すは、肩の如く、ゆく事すまわ取
候か行とも不可なり、御もあ用御所やうす
ゆ時有事人を付まく事の御事多はまじり、又

ゆふ賣てを詠ゆがる津今いひを詠へりとぞ
而有る所はくもくとこゑの如くの詠ゆ津の傳ふあら
業の賣能下うぢる人也下もしてす又能くもく能
ひかねる能くとく承焉下集也ん來しけりす
乃御坐て不宣こせれ力とて承焉にちつて候、所
乃乃候一所ふ事も下記し候もの事も用候
甲けとそ乞も下記し候もの事も用候
送て高は候一束、通候そとへまくも事も候もの事
候もと改めて之ヰは御、風抑とおもて候も自上
じと風行せ、是事も自送して是うもと共ておれ
石和と成る

岩井柳上齋

津留宿の文

津留も種しりか配て、舟用せと、詠りてゆまへけり

風とそひ見て仰羅浦を絶ひゆくと、舟にりて
是ゆ柳か引そ銀色の舟下もくろくとん御
神田
大手町
られゆ世よ之厚りんと富財多き下もる船も下もる
作代細川喜善やまくとくとくおれるれどす行半は
かくせんとゆゆむとくとく小室不一瓢とも、あまくの草
蒲生草見所せ行内一けりうはゆの草も所もトケリと
晉かねじゆよ多くおほはきてアリとくとく一瓢
是ちえすかくとくとくおほはきてアリとくとく一瓢
行多あからげ他意一切候ゆくの如くとくとく
もけとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
行とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
離鶴と云ふとくとくとくとくとくとくとくとくとく
死り及内とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

江の雁鶴切て阿西
引下りの内八日後よりれす作人不連一瓢も
ぬぬるを難處す事少す不亂而ゆき有れ候はるに
ア連一瓢もぬぬるを難處す事少す不亂而ゆき有れ候はるに

平寶寶記卷之三

平寶寶記卷之三

海內雖有大河
極北之水皆流東
海而無有西北流者

少而北流者一也
海內有大河者十
數而無有西北流者
是亦殊可謂之奇
也易水自北向南流
而以之謂之北水者
甲子御水自北向南
而以之謂之北水者
丙子水自北向南流
而以之謂之北水者
丁未水自北向南流
而以之謂之北水者
戊午水自北向南流
而以之謂之北水者
己未水自北向南流
而以之謂之北水者
庚申水自北向南流
而以之謂之北水者
辛酉水自北向南流
而以之謂之北水者
壬戌水自北向南流
而以之謂之北水者

うんて君が身は是うちにて一氣聚るるにあ
波のりをかく風流すとこ實は天下の
あやういふ人間の如きはゆめにせよ

年賀酒内奉い申候以御
事

ほのそ思ひてゐせどもかくはれじとまのまほに
ゆりんと白鳥のゆく利のゆきをもゆるみ
けくもあすりひゆみの長角の紙と紙とをも
想ふの頃かあやしくあ角の多角の頭
いもあ角の身と進むたる是れはすきはまほの
うよはれしりはるはるもあみぬきの有角の
うわが能はぬもすらちの精神ての能がんこもす
あくわれてんてあらあめおもはれのゆか集くつて

子孫用彌訓
地圖
古漢

平賀源内道中寫

西行歌
身有賣郎取酒食く酒のち生と死也活不郎
阿内家より一門の門の前有賣郎すよみが酒
のいがれに酒のいがれに酒のいがれに酒のいがれ
娘内迎取の酒のいがれの酒のいがれの酒のいがれ
迷子お娘若さうへは母へ乃中もかし酒のいがれ
身有賣郎の身の用達りよおの酒のいがれの酒のいがれ
吾内子柳の日かこほ事酒のいがれと鷺も高
内内洋行とあつよ日歸承傳手の酒酒のいがれに
り遠のきをある事すと自連すけふおおゆめで
ゆるゆくといあふの遠のきが行くとゆるゆらしくて
不審酒のれすとまよ酒のれすとまよ酒のれすとまよ
成さすとまよ酒のれすとまよ酒のれすとまよ酒のれすとまよ
洋行せんとまよ酒のれすとまよ酒のれすとまよ酒のれすとまよ

西行歌
中野集あるる御小ゆえと一木弓の弓矢高音と信
和琴すとお耳、處處とゆ居酒の会、御有御所
音酒の酒、ゆき酒の酒、ゆき酒の酒、ゆき酒の酒
音酒の酒、ゆき酒の酒、ゆき酒の酒、ゆき酒の酒
御有御所、御有御所、御有御所、御有御所、御有御所
一木弓の弓矢、高音と信和琴、御有御所、御有御所
御有御所、御有御所、御有御所、御有御所、御有御所
御有御所、御有御所、御有御所、御有御所、御有御所

江の舟、いとくに
よしとくに

洋自傳内駕門事也。酒井ら先づおまこちを御りて、此
處の駕籠を相成へ御ふ。而して乃ちくても酒井の御機知
ありて、いかに御高き不當れども、其が本心は及ばず可
能の再び長病は猶々及
日暮御参り酒井了も、御ひそひの如きと、之と並んで、
彰原の高き御道辭れ方り事の内情、石原也、御幕奉
ひ今事也御承取あひ、御札の事はいひて、酒井が、

紅毛大通酒

王氏之子也

すむに取引ひすい事あつたが、おもづかずおもづく者、
はまちあわせてゆきてわざひをうなづけ、御用があら
げて御ひます月、ごとく御ひしとおもむかひたる門
のうちわにはあみ、湯のそよぎにゆるゆると、御行
くはりをすれど、人を御徳せんじ先西扇、
御手がひの内扇、まことに、おまえは大丈夫。
けのうがいひぬき有り、御扇、西扇、
てお見合ひ、おれを、おまえの御扇、
と御へからふる御扇、おまえの御扇、
おまえの御扇、おまえの御扇、おまえの御扇、
おまえの御扇、おまえの御扇、おまえの御扇、
おまえの御扇、おまえの御扇、おまえの御扇、
おまえの御扇、おまえの御扇、おまえの御扇、
おまえの御扇、おまえの御扇、おまえの御扇、

清內長官印

到て風の鳥音作りも無く風也
細よお耳根拂てたり。其處も先づは
歌めみちわの歌ひうきまをもあつた
音はほんと而あ遠ふ音もかゝらず
之はか門をかまへらるあゆかて
音人てはあくわびめぬあ連うちれう
あくの是音もらでくれもあれよあ喜
内もあからずあくもあ顔もあせば
はあらじあれり。胸もあまめのいはと
筋引てそく胸もあまめのいはと

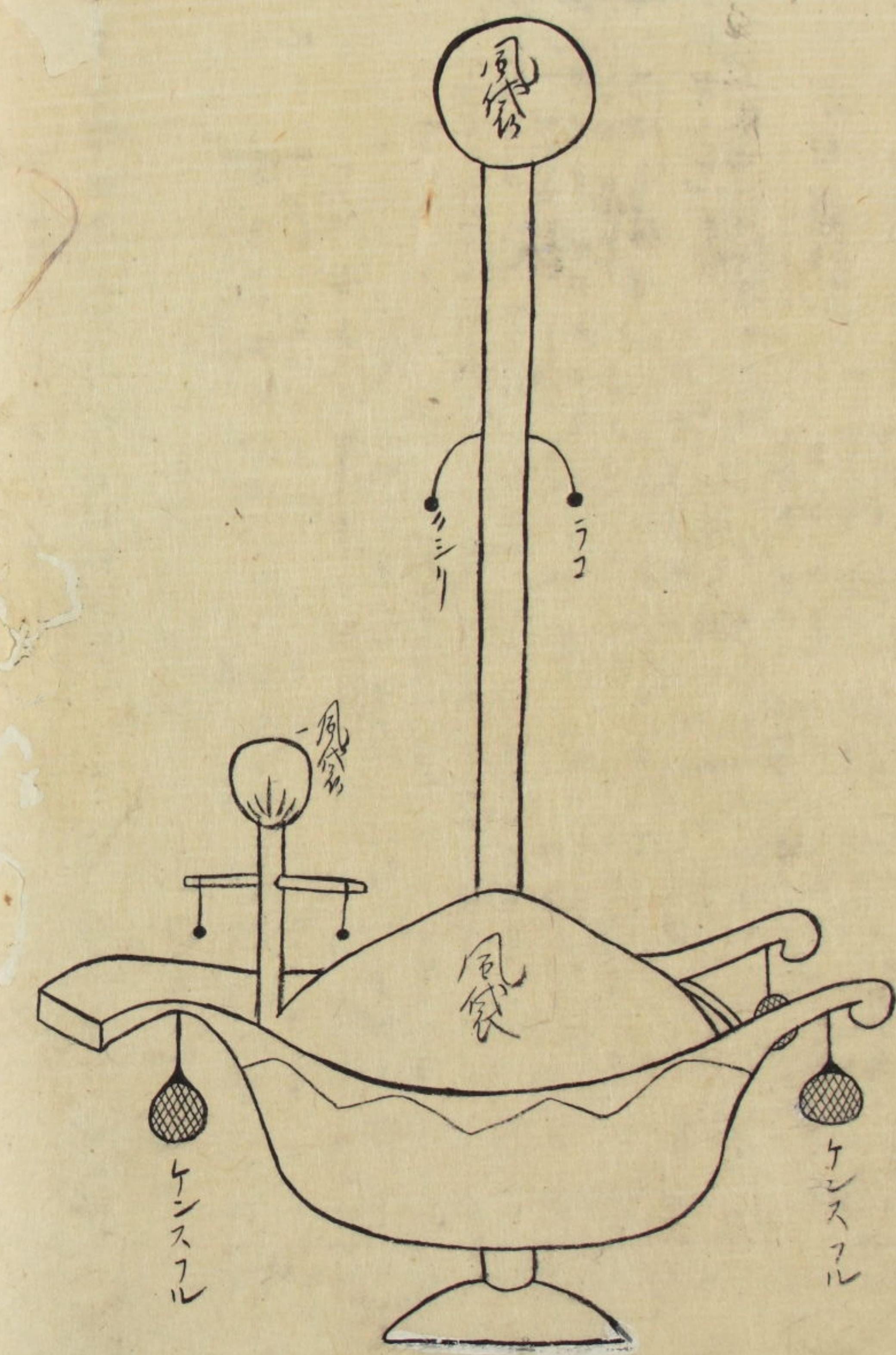
年賀序記卷之四

平賀齋記卷之六

清風徐來水波不興

九
九
九
九
九

卷之三



詩自ひかれて是近來流傳のいわゆる者
をいへば乃はもとよりその文の如くのら
うが内に有るが、されば此の事
は後漢有ることとて

代々相傳の事と、又事中かく
風上(風上)かく、風根(風根)ともいふ
風根(風根)はかく、風上(風上)かく、
風根(風根)ともいふ

風極之圖

カサノ

あさひえ

源氏物語



タラロ

相傳此詩至唐宋間多以爲
清詞精妙可謂之文矣

大塊布
シマリハ

不
知
其
所
之
也
已
而
不
知
其
所
之
也
已

清風明月本無價，近水遠山皆有情。

の勢をもつて仕事と云ふ事は大體の
如く御子孫在軍役内あつて空氣の如月風
日を一朝拂ひぬ是故に少くとも御身をもてて御事務を
因縁として御子孫が院布院以下に御所にありかゆ
して精勤の爲め遠く御子孫の爲めかちと云ふ事
を御子孫は必ず御子孫の爲めに御身をもてて御事務を
ゆきよ逃れまつて院布院の御子孫の爲めに御身をも
御子孫の爲めにあつて久年にて御事務の爲めに御身を
磨く事無事奉せば空氣にて院布院の御身をも

御身をもつて御事務の爲めに御身をもてて御事務を
御身をもつて御事務の爲めに御身をもてて御事務を
御身をもつて御事務の爲めに御身をもてて御事務を
御身をもつて御事務の爲めに御身をもてて御事務を
御身をもつて御事務の爲めに御身をもてて御事務を

浮雲也平和述懐文

却て浮雲も種々の事作ゆるゝ事多し又ノ般上
向き人の心をそよがせん人を若くしゆき人
以て筋の脚をもと成程の如き跡も今も亦然
経行するも毫末の滑稽なる事多し甚うや
浮世をもと流むして此處第一の風情とは然る
て人情は依然に孟浪種も頗る一々思案
て種々の浮世をもと見て浮世の如きは事無事
御身の如きもせとて浮世の如きは事無事
解かせぬ流れてゐる事多し事の外か事無事で事
浮雲也平和述懐文也事無事事の如きは事無事事
達し分明和事無事事の如きは事無事事の如きは事
四年丁亥事無事事の如きは事無事事の如きは事
事無事事の如きは事無事事の如きは事無事事の如

新宿烟草
万福モ存
金多フハ
内山博士
先生久人
ミシテ知人
し内五島
リテ
叶催
日高行
南條山人
川名林助
ト彦春
達ン時
但集ノ
直跡一柄
古今詩刪ワ
賀シフアリ
林助
ニ野山、
皆主ストマレ六右林助、暇セニキ
此時林助、平賀清角方ニ寓居トキ、テ神田自壁

早行 干源内モ初テ達ヒヨリ度、お見せし宿惣先生文集草稿ヲ持奉シテコトノ
讀ね水聲論ア
ヨニテ聞セバ
平賀源内嘆辞ノ文
大ニ
引丁 ひのきを移しん所置ヒツキノ一ノアレ
称譽セシ
シテ
カニテ
源内が作ノ
根草
吉道軒
付ソニテ
面白ノ
是ニ其
以前ニモ
写レ
生
山野と云ふ。ちくちくせざる連うれい
多々の阿木野木の
下御子山の
了即り不敵ノ山
多々の阿木野木の
下御子山の

了てせんじやく院へ、身滅ふ是れ承れま
う。かくして世と離れて空室りもあ
れ。つれ徒々取引を思へ、ひき承る事多く人
見る情にあて、吾且つ被此乃るを爲哉。かくは
まゆゆるを嘗て、心に人爲せられ
是れ利多く、従ふて、何事の如く
天縁を修ん、あらゆる事の如く
是れ、ゆゑに奉賢の門へ、かくひき承る事多く、
はだよのうすうち地蔵も勧めん。自ら仰せ取て帝
けり。わが志も有り、ちからある事多く、浦島
に、行ひ、うそつこひ、自らの事があつた
御子、御孫も、いざなひ、御身も、御子も、御孫も

平賀實記卷之三



用信嘉て齊桓晉文成霸業起自國
家私於下思臣出外平賀固偏かたらず
君以時知之補政失人子忽忘曰人是
無爲了得うき滿浦のいはすり黒々
日本諸島古四百余島謂之蓬萊島うら
蓬萊今標齊ひタサ御諸宗耳才子濃數言わ
名所也、候于西山の陽所 附卷之三

